Shintani Functions and Rankin-Selberg Convolution II. Global Theory

京都産業大・理 村瀬篤 (Atsushi Murase) 広島大・理 菅野孝史 (Takashi Sugano)

このノートでは、Rankin-Selberg convolution を 新谷関数を用いて表示することによって、古典群上の保型形式に付随する標準的L関数を行列サイズについて帰納的にとらえる. 完全に閉じた形で求められている定値直交群の場合を中心に述べ、最後にユニタリ群の場合に触れることにする(定値直交群の場合、詳しくは [5] を参照されたい).

§ 1. Local Theory 補足

帰納的な議論の為に、Part I で扱った split case を少し一般化しておく、k を \mathfrak{p} -進体、 \mathfrak{o} を k の整数環とする。 \mathfrak{o}^m が m 次偶対称行列 $S\in M_m(\mathfrak{o})$ に関し、極大 \mathfrak{o} -integral lattice となるとき、S を単に \mathfrak{p} -maximal と呼ぶことにする。これは、 $S[g^{-1}]={}^tg^{-1}Sg^{-1}$ が任意 の $g\in M_m(\mathfrak{o})\cap GL_m(k)-GL_m(\mathfrak{o})$ に対して偶対称行列でないということと同値。

G を S の直交群, $K=G\cap GL_m(\mathfrak{o})$ とし、K の指数有限正規部分群 K^* を、

$$K^* = \left\{ u \in K \mid (u - 1)S^{-1} \in GL_m(\mathfrak{o}) \right\}$$

と定義する. 商群 $E=K/K^*$ は、単位群、位数 2 の巡回群、位数 2(q+1) の二面体群のいずれかに同型となる(ここで、q は剰余体 $|\mathbf{o}/\mathbf{p}|$ の位数). G の K^* に関する Hecke 環

$$\mathcal{H}(G,K^*) \stackrel{\mathrm{def}}{=} \left\{ \phi: G \longrightarrow \mathbf{C} \;\middle|\; \phi(u_1gu_2) = \phi(g) \quad \forall u_1, u_2 \in K^*, \; \mathrm{supp} \; \phi: \mathrm{compact} \right\}$$

については、通常 $\mathcal{H}(G,K)$ の場合 $(\mathrm{cf.}\ [8])$ と同様にして構造が調べられる。特に、

$$\mathcal{H}(G, K^*) \cong \mathbf{C}[E][X_1^{\pm 1}, \dots, X_{\nu}^{\pm 1}]^{W_{\nu}}$$
 (ν : Witt index of S, W_{ν} : Weyl group)

を知る. また、 $\mathcal{H}(G,K^*)$ の中心 \mathcal{H}^+ から、C への algebra homomorphism λ (指標)は、 k^{\times} の ν 個の不分岐指標の組(modulo W_{ν}) $\pmb{\lambda}=(\lambda_1,\ldots,\lambda_{\nu})$ と、有限群 $E=K/K^*$ の既約表現(の同型類) ρ の対 $(\pmb{\lambda},\rho)$ で記述される. これを λ の Satake parameter と呼ぶ.

 \mathcal{H}^+ の指標 λ に対して、その標準的 L 関数を次の様に定義する.

$$L_{\mathfrak{p}}(\lambda;s) = L_{\mathfrak{p}}^{0}(\lambda;s)A_{\rho,\mathfrak{p}}(s),$$

$$L_{\mathfrak{p}}^{0}(\lambda;s) = \prod_{j=1}^{\nu} \left\{ (1-\lambda_{j}(p)q^{-s})(1-\lambda_{j}^{-1}(p)q^{-s}) \right\}^{-1},$$

$$A_{\rho,\mathfrak{p}}(s) \ = \begin{cases} 1 & (n_0,\partial) = (0,0) \text{ or } (1,0) \\ 1 + \lambda_0 q^{-(s-1/2)} & (n_0,\partial) = (1,1) \\ (1 - q^{-2s})^{-1} & (n_0,\partial) = (2,0) \\ (1 - \lambda_0 q^{-s})^{-1} & (n_0,\partial) = (2,1) \\ (1 - \lambda_0 q^{-(s+1/2)})^{-1} & (n_0,\partial) = (2,2) \\ (1 - \lambda_0 q^{-(s+1/2)})^{-1} & (n_0,\partial) = (3,1) \\ (1 - \lambda_0 q^{-(s+1/2)})^{-1} (1 + \lambda_0 q^{-(s-1/2)}) & (n_0,\partial) = (3,2) \\ (1 - \lambda_0 q^{-s})^{-1} (1 - \lambda_0 q^{-(s+1)})^{-1} & (n_0,\partial) = (4,2) \text{ and } \lambda_0 \neq 0 \\ (1 - q^{-2s})^{-1} & (n_0,\partial) = (4,2) \text{ and } \lambda_0 = 0. \end{cases}$$

ここで、 $n_0 = m - 2\nu$ 、 $\partial = \dim_{\mathfrak{o}/\mathfrak{p}} L'/\mathfrak{o}^m$ 、 $L' = \{x \in S^{-1} \cdot \mathfrak{o}^m \mid {}^t x S x \in 2\mathfrak{p}^{-1}\}$ であり、p で \mathfrak{o} の素元を表した。また、 $\lambda_0 = \lambda_0(\rho)$ は、 ρ が trivial 表現のとき 1 を、E の指数 2 の部分群上 trivial な表現の場合には -1 を、それ以外は 0 を表す.

m+1 次の \mathfrak{p} -maximal 偶対称行列でその左上 $m\times m$ ブロックが S となる $\underline{S}=\begin{bmatrix}S&-S\alpha\\-^t\alpha S&-2a\end{bmatrix}$ を考え,その直交群を \underline{G} で表す.また \underline{K} 及び \underline{K}^* を同様に定義する.G

を \underline{G} に $\iota_0(g) = \begin{bmatrix} g & (1-g)\alpha \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$ により埋め込むと、 $\iota_0(K^*) = \underline{K}^* \cap \iota_0(G)$ が成立する.なお、この関係は K と \underline{K} については一般には成り立たないことに注意(これが Hecke algebra が非可換となるにもかかわらず K^* をとった主な理由).Hecke 環の中心 $\mathcal{H}^+ = \mathcal{H}(G,K^*)^+$ の指標 λ と、 $\underline{\mathcal{H}}^+ = \mathcal{H}(G,\underline{K}^*)^+$ の指標 Λ に対し,local Shintani functions の空間が、

$$\mathrm{Sh}(\lambda, \Lambda) \stackrel{\mathrm{def}}{=} \left\{ W : K^* \backslash \underline{G} / \underline{K}^* \longrightarrow \mathbf{C} \;\middle|\; \phi * W * \varPhi = \lambda(\phi) \Lambda(\varPhi) W, \quad \phi \in \mathcal{H}^+, \varPhi \in \underline{\mathcal{H}}^+ \right\}$$

と定義される. ここで,

$$\phi*W*\varPhi(g)\stackrel{\mathrm{def}}{=} \int_G \int_{\underline{G}} \phi(x)\varPhi(y)W(xgy^{-1})dxdy, \quad \mathrm{vol}(K^*)=\mathrm{vol}(\underline{K}^*)=1.$$

Part I にあるように、 G, \underline{G} がともに split していて、 $2^{-1} \det S \det \underline{S} \in \mathfrak{o}^{\times}$ ならば、この空間は 1 次元であり、その explicit formula も分かっている (cf. [1]). Witt index を一つ上げた

$$S_1 = \left[\begin{array}{cc} & 1 \\ & S \\ 1 \end{array} \right]$$

の直交群を G_1 とし、その部分群 K_1,K_1^* を同様に定義する. $\iota:\underline{G}\longrightarrow G_1$ を、像が $\eta=\begin{bmatrix}a\\\alpha\\1\end{bmatrix}$ の固定化部分群となるように定める. また G_1 の岩沢分解を、

$$g = \begin{bmatrix} \alpha(g) & * & * \\ & \beta(g) & * \\ & & \alpha(g)^{-1} \end{bmatrix} u(g), \quad u(g) \in K_1^*$$

と書くことにする.次の命題はL関数の一つの積分表示を与えている.

Proposition 1 $W \in Sh(\lambda, \Lambda)$ に対し、

$$\int_{G\setminus \underline{G}} W(\beta(h)^{-1}h) |\alpha(h)|_{\mathfrak{p}}^{s+(m-1)/2} dh = W(1) \frac{L_{\mathfrak{p}}(\Lambda;s)}{L_{\mathfrak{p}}(\lambda;s+1/2)} \times \begin{cases} 1 & m : \text{ even} \\ 1-q^{-2s} & m : \text{ odd.} \end{cases}$$

§ 2. Rankin-Selberg convolution

以下、k を n 次の総実代数体、 o_k をその整数環とする。m 次の総正定値偶対称行列 S が、全ての有限素点 p に於いて前 g の意味で p-maximal であるとき、単に G は maximal であるという。G の直交群 G の素点 G での完備化を G0 で表し、前 g 導入した開コンパクト部分群を G1 で表す(アルキメデス的素点 G2 に対しては、G3 に対しては、G4 と解釈する)。全ての素点 G3 についての G4 に保型形式の空間

$$\mathfrak{S}(K_A^*) \stackrel{\mathrm{def}}{=} \left\{ f : G_k \backslash G_A / K_A^* \longrightarrow \mathbf{C} \right\}$$

を考える. この空間には、convolution により $\mathcal{H}_{\mathfrak{p}}^+ = \mathcal{H}(G_{\mathfrak{p}}, K_{\mathfrak{p}}^*)^+$ が可換正規に作用しており、同時固有関数からなる基底を持つ. $f \in \mathfrak{S}(K_A^*)$ が、 $\otimes_{\mathfrak{p}}' \mathcal{H}_{\mathfrak{p}}^+$ の同時固有関数 (Hecke eigen form)

$$f * \phi = \lambda_f(\phi) f \quad (\forall \phi \in \otimes'_{\mathfrak{p}} \mathcal{H}^+_{\mathfrak{p}})$$

であるとき、大域的なL関数 L(f;s) 及び gamma factor $L_{\infty}(f;s)$ を

$$L(f;s) = \prod_{\mathfrak{p}<\infty} L_{\mathfrak{p}}(\lambda_{f};s),$$

$$L_{\infty}(f;s) = |d_{k}|^{[m/2]s} \left((2\pi)^{-[m/2]s} \prod_{j=1}^{[m/2]} \Gamma(s-j+m/2) \right)^{n}$$

$$\times \begin{cases} (N_{k/\mathbf{q}}(\det S))^{s/2} & m : 偶数 \\ (N_{k/\mathbf{q}}(2^{-1}\det S))^{s/2} & m : 奇数 \end{cases}$$

で定義する $(d_k$ は k の絶対判別式).

我々の目標は、 $\xi(f;s)=L_{\infty}(f;s)L(f;s)$ の解析接続・関数等式についての次の定理にある。

Theorem 1 $f \in \mathfrak{S}(K_A^*)$ を Hecke eigen form とする. このとき,

- (1) $\xi(f;s)$ は全 s-平面に有理型関数として解析接続され, $s \longrightarrow 1-s$ で不変.
- $\xi(f;s)$ は s=2/m-j $(0 \le j \le m-1)$ で高々 simple pole をもつ他では正則.
- (3) $\xi(f;s)$ が s=m/2 で本当に極をもつ必要十分条件は、f が定数関数であること.

Remark 1 (3) において $\xi(f;s)$ の最大 possible pole (s=1/m) の特徴付けが与えられているが、その他の possible poles での挙動は不明. これらの点における正則性または pole の意味付けを与えることは興味深い問題と思われる.

m+1 次の直交群を、新谷関数を用いて m 次の直交群と(大域的に)関連付ける為に、一つ準備を行う、証明は、良く知られた二元二次形式による数の表示についての事実

(これは二次拡大体の L 関数の s=1 での挙動からの帰結)と、特殊線型群に対する強近似定理から従う.

Proposition 2 $T \in M_{m+1}(\mathfrak{o}_k)$ を m+1 次の総正定値 maximal 偶対称行列とする. このとき, m 次 maximal 偶対称行列 S と, $\gamma \in SL_{m+1}(\mathfrak{o}_k)$ で,

$${}^{t}\gamma T\gamma = \underline{S} = \begin{bmatrix} S & -S\alpha \\ -{}^{t}\alpha S & -2a \end{bmatrix}$$

となるものが存在する.

以下、m 次の場合に Theorem 1 が成立しているとする. 上の命題より、m+1 次の総正定値 maximal 偶対称行列 T の直交群上の Hecke eigen form F に対する主張を確かめるためには、 $T=\underline{S}$ 及び $F(1)\neq 0$ として一般性を失わない. このとき、Hecke eigen form $f\in \mathfrak{S}(K_A^*)$ で Petersson 内積 $\langle F|_{G_A},\overline{f}\rangle_G\neq 0$ となるものが存在する.

m+2 次の直交群 G_1 上の (f に付随した) Eisenstein 級数を

$$E(g, f; s) \stackrel{\text{def}}{=} \sum_{\gamma \in P_{1,k} \setminus G_{1,k}} f(\beta(\gamma g)) |\alpha(\gamma g)|_A^{s+m/2} \quad (g \in G_{1,A})$$

により定義する.ここで, P_1 は G_1 の上三角型の放物部分群であり,アルキメデス素点 v での $G_{1,v}$ の極大コンパクト部分群 $K_{1,v}^*$ として $\eta=\begin{bmatrix}a\\\alpha\\1\end{bmatrix}$ の固定化部分群をとった岩沢分解 $G_{1,A}=P_{1,A}K_{1,A}^*$ を

$$g = \left[\begin{array}{ccc} \alpha(g) & * & * \\ & \beta(g) & * \\ & & \alpha(g)^{-1} \end{array} \right] u(g) \quad (g \in G_{1,A})$$

で表した. 記述を簡単にするため、normalizing factor

$$d(f;s) = |N_{k/\mathbf{Q}}(a+S[\alpha]/2)|^{s/2}\xi(f;s+1) \times \begin{cases} 1 & m : \text{even} \\ \xi_k(2s+1) & m : \text{odd} \end{cases}$$

 $(\xi_k(s)$ は、k の completed Dedekind zeta 関数)

を乗じた $E^*(g,f;s)=d(f;s)E(g,f;s)$ を用いる. E^* は全 s-平面に有理型関数として解析接続され、関数等式

$$E^*(g,;f;s) = \frac{\xi(f;s)}{\xi(f;1-s)} E^*(g,f;-s)$$

を満たすことが分かる(帰納法の仮定より,右辺の最初の因子は1となる).

Proposition 3 (Basic Identity) $F \in \mathfrak{S}(\underline{K}_A^*), f \in \mathfrak{S}(K_A^*)$ に対し、

$$\int_{\underline{G}_k \backslash \underline{G}_A} F(h) E^*(\iota(h), f; s-1/2) dh = d(f; s-1/2) \int_{G_A \backslash \underline{G}_A} W_{F,f}(\beta(h)^{-1}h) |\alpha(h)|_A^{s+(m-1)/2} dh$$

が成立する. ここで、 $W_{F,f}$ は次の global 新谷関数

$$W_{F,f}(h) = \int_{G_k \setminus G_A} F(\iota_0(g)h) f(g) dg \quad (h \in \underline{G}_A).$$

 $F*\Phi=\lambda_F(\Phi)F$ ($\Phi\in\mathcal{H}_p^+$), $f*\phi=\lambda_f(\phi)f$ ($\phi\in\mathcal{H}_p^+$) を満たすならば, $W_{F,f}$ は G_p 上の関数として, 前§で導入した局所新谷関数の空間 $\mathrm{Sh}(\lambda_f,\lambda_F)$ に属する. 従って, F,f が Hecke eigen form ならば, Proposition 1 と Proposition 3 により,

$$\langle F, \overline{E^*(*,f;s-1/2)} \rangle_{\underline{G}} = \xi(F;s) \cdot \langle F|_{G_A}, \overline{f} \rangle_G$$

が成立する. ここで $\langle \ , \ \rangle_G, \langle \ , \ \rangle_G$ は、それぞれ $\mathfrak{S}(\underline{K_A^*}), \mathfrak{S}(K_A^*)$ の Petersson 内積. 仮定より、 $\langle F|_{G_A}, \overline{f} \rangle_G \neq 0$ ゆえ、 $\xi(F;s)$ の解析接続・解析接続が Eisenstein 級数のそれから得られ、証明が終わる.

Remark 2 $\underline{S} = \begin{bmatrix} S & -S\alpha \\ -^t\alpha S & -2a \end{bmatrix} \in M_{m+1}(\mathfrak{o}_k)$ とし、 $F \in \mathfrak{S}(\underline{K}_A^*), f \in \mathfrak{S}(K_A^*)$ を Hecke eigen form とする、 $\{g_i \mid 1 \leq i \leq h = h(S)\}$ を $G_k \setminus G_A / K_A^*$ の完全代表系とするとき、

$$W_{F,f}(1) = \langle F|_{G_A}, \overline{f} \rangle = \sum_{i=1}^h \frac{1}{e_i} F(g_i) f(g_i), \quad e_i = \#(G_k \cap g_i K_A^* g_i^{-1})$$

である. 特に、f=1 を G_A 上つねに 1 となる関数にとれば、 $W_{f,1}$ は左 G_A 不変な新谷 関数となる. 従って $[3,\S1.13]$ より、 $W_{F,1}(1)\neq 0$ のとき、

$$L(F;s) = L'(s) \prod_{j=1}^{m-2} \zeta_k(s - (m-1)/2 + j) \times \begin{cases} L(\chi_K;s) & m+1 : \text{even} \\ 1 & m+1 : \text{odd} \end{cases}$$

と分解されることがわかる.ここで, ζ_k は k の Dedekind zeta 関数, $L(\chi_K;s)$ は k の 2 次拡大 $K=k(\sqrt{(-1)^{(m+1)/2}\det S})$ に対応する Dirichlet 指標の L 関数であり, L'(s) は 殆ど 2 次の Euler 積.即ち,F の L 関数が(本質的に parameter が 1 個にまで)大幅に 退化する.特に,h(S)=1 ならば $F(1)\neq 0$ なる任意の F はこの形となる.

Example 1 (cf. 立川 [10]) Q 上の 5 次の正定値偶対称行列で、行列式が 74 であるものを考える。これは、maximal で唯一つの genus からなる。この genus の $GL_5(\mathbf{Z})$ 同値類の一つの完全代表系は、

$$T_{1} = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 2 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 2 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 16 \end{bmatrix}, T_{2} = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 & 0 & 1 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 2 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 0 & 10 \end{bmatrix}, T_{3} = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 2 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 4 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 6 \end{bmatrix},$$

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, T_{3} = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 1 & 6 \end{bmatrix},$$

$$T_4 = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & -1 & -1 \\ 1 & 0 & -1 & 4 & 0 \\ 1 & 0 & -1 & 0 & 6 \end{bmatrix}, T_5 = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 1 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 4 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 4 \end{bmatrix}$$

で与えられる. $S=T_1$ の直交群を G で表す. 今の場合, $\#(G_{\mathbf{Q}}\backslash G_A/K_A^*)=\#(G_{\mathbf{Q}}\backslash G_A/K_A)$ ゆえ, $\dim_{\mathbf{C}}\mathfrak{S}(K_A^*)=5$. Hecke eigen basis は,

$$\{F_0 = \mathbf{1}, F_\alpha \mid \alpha^4 - 18\alpha^3 + 107\alpha^2 - 220\alpha + 66 = 0\}$$

で与えられる. $F_0(1) \neq 0$, $F_{\alpha}(1) \neq 0$ であることが分かり、上の Remark より、L 関数は全て退化している. p=2,3 のときの local factor は、

$$L_{2}(F;s)^{-1} = (1 - 2^{-s-1/2})(1 - 2^{-s+1/2}) \times \begin{cases} (1 - 2^{-s-3/2})(1 - 2^{-s+3/2}) & F = F_{0} \\ 1 + (6 - \alpha) 2^{-s-3/2} + 2^{-2s} & F = F_{\alpha} \end{cases}$$

$$L_{3}(F;s)^{-1} = (1 - 3^{-s-1/2})(1 - 3^{-s+1/2}) \times \begin{cases} (1 - 3^{-s-3/2})(1 - 3^{-s+3/2}) & F = F_{0} \\ 1 + \beta 3^{-s-3/2} + 3^{-2s} & F = F_{\alpha} \end{cases}$$

となる. ここで、 $\beta=\{\alpha^3-9\alpha^2+26\alpha-26\}/8$ で、これは、 $\beta^4-11\beta^3+6\beta^2+89\beta+23=0$ の根.

§ 3. unitary 群の場合

k を虚 2 次体,S を非退化な m 次の skew hermitian matrix とし,G を S のユニタリ群とする.全ての有限素点 p において, $(\mathfrak{o}_{k,p})^m$ が S に関して maximal integral lattice であると仮定する.§ 1 と同様に, $G_p \supset K_p \rhd K_p^*$ が定義され,local Hecke algebra $\mathcal{H}_p = \mathcal{H}(G_p,K_p^*)$ の構造が決定される.また,その中心 \mathcal{H}_p^+ の指標 λ_p に対して,local standard L 関数 $L_p(\lambda_p,s)$ が定義される(殆ど全ての p に対して,分母が p^{-s} の 2m 次式).

 $G_{\infty}=G_{m R}$ の極大コンパクト群を K_{∞} とすると、良く知られているように $\mathcal{X}=G_{\infty}/K_{\infty}$ は hermitian symmetric domain となる、 G_{∞} の \mathcal{X} への作用に関する自然な正則保型 因子を $J_G(g,X)$ $(g\in G_{\infty},X\in\mathcal{X})$ で表し、 $\chi_{K_{\infty}}(u)=\det J_G(u,X_0)$ $(u\in K_{\infty}=X_0$ の固定化部分群)とおく、 $K_{A,f}^*=\prod_{p<\infty}K_p^*$ に関する weight $l\in \mathbf{N}$ の正則尖点形式の空間を

$$\mathfrak{S}_{l}(K_{A,f}^{*}) = \left\{ f : G_{\mathbf{Q}} \backslash G_{A} / K_{A,f}^{*} \longrightarrow \mathbf{C} \mid \begin{array}{c} f(gu) = \chi_{K_{\infty}}(u)^{-l} f(g) \ \forall u \in K_{\infty} \\ \text{bounded}, \quad \mathcal{X} 上で正則 \end{array} \right\}$$

で定義する (l は $\#(o_k^{\times})$ の倍数とする).

以下、 K_A^{\times} の不分岐量指標 $\omega = \prod_v \omega_v$ で、 $\omega_{\infty}(x) = (x/|x|)^l$ となるものを一つ固定する.Hecke eigen form $f \in \mathfrak{S}(K_{A,f}^*), f * \phi = \lambda_f(\phi)f$ $(\phi \in \otimes' \mathcal{H}_p^+)$ に対し、次の global L 関数

$$L(f \otimes \omega; s) \stackrel{\text{def}}{=} \prod_{p < \infty} L_p(\lambda_f \otimes \omega_p; s)$$

を考える. ここで、 $L_p(\lambda_f \otimes \omega_p; s)$ は、 λ_f の Satake parameter を ω_p で twist して得られる local L 関数である (cf. [9], [2]).

有限素点での新谷関数については、直交群の場合と同様の結果が得られる。特に split prime p では、 $G_p \cong GL_m(\mathbf{Q}_p)$ であり、存在と一意性が分かっている(cf. [4])。無限素点

に関して簡単に述べよう.

$$\mathcal{H}_{l}^{\infty}(G_{\infty}, K_{\infty}) \stackrel{\text{def}}{=} \left\{ f: G_{\infty} \longrightarrow \mathbf{C} \left| \begin{array}{c} f(gu) = \chi(u)^{-l} f(g) & \forall u \in K_{\infty} \\ \text{bounded かつ } \mathcal{X} \ \bot 正則 \end{array} \right. \right\}$$

とおくと、 $\mathfrak{S}(K_{A,f}^*)\subset\mathcal{H}_l^\infty$ であり、十分大なる l に対しては、

$$\omega_{G,l}(u_1gu_2) = \chi_{K_{\infty}}(u_1)^{-l}\chi_{K_{\infty}}(u_2)^{-l}\omega_{g,l}(g) \quad (\forall u_1, \forall u_2 \in K_{\infty})$$

$$f(g) = \int_{G_{\infty}} f(x)\omega_{G,l}(x^{-1}g)dx \quad (\forall f \in \mathcal{H}_l^{\infty})$$

となる G_∞ 上の C-値関数が唯一つ存在する. 我々の扱う正則尖点形式の場合には、この $\omega_{G,l}$ が Bergman 核関数として具体的に分かるため、有限素点に平行な議論によって、必要な結果を得ることになる.

$$\operatorname{Sh}_{\infty}(l) \stackrel{\operatorname{def}}{=} \left\{ W : \underline{G}_{\infty} \longrightarrow C \,\middle|\, \begin{array}{c} W(u_{1}hu_{2}) = \overline{\chi_{K_{\infty}}(u_{1})^{-l}\chi_{K_{\infty}}(u_{2})^{-l}W(h)} \\ W \in \mathcal{H}_{l}^{\infty}(\underline{G}_{\infty}, \underline{K}_{\infty}), \ W_{x_{0}} \in \mathcal{H}_{l}^{\infty} \end{array} \right\}$$

により定義される.ここで、 $x_0 \in \underline{G}_{\infty}$ に対し、 $W_{x_0}(y) = \overline{W(x_0^{-1}y)} \ (y \in G_{\infty})$ とおいた.

$$S_1 = \begin{bmatrix} & & -1 \\ & S & \\ 1 & & \end{bmatrix}, \quad \eta = \begin{bmatrix} a \\ \alpha \\ 1 \end{bmatrix}$$

とおき、 S_1 のユニタリ群を G_1 に G を η の固定化部分群として埋め込む.

Proposition 4 l を十分大とするとき、 $W \in Sh_{\infty}(l)$ に対し、

$$\begin{split} &\int_{G_{\infty}\setminus\underline{G}_{\infty}}W(\beta(h)^{-1}h)\omega_{s+m/2}(\alpha(h)/|\alpha(h)|)^{l}\chi_{1}(u(h))^{l}dh\\ &=W(1)\Gamma(s+(l-m)/2)\times\left\{ \begin{array}{ll} \Gamma(s+(l-n_{0})/2)^{-1} & i\det\underline{S}/\det S>0\\ \Gamma(s+(l+n_{0})/2)^{-1} & i\det\underline{S}/\det S<0. \end{array} \right. \end{split}$$

ここで、 $\alpha(h),\beta(h),u(h)$ は、§ 1 と同様に G_1 の岩沢分解に現れる量であり、 $G_{1,\infty}$ の極大コンパクト群 $K_{1,\infty}$ の指標 $\chi_{K_{1,\infty}}$ を上と同様に定義した。また、 $x\in k_A^{\times}$ に対し、 $\omega_s(x)=\omega(x)|x|_{k_A}^s$ とおいた.

最後に Eisenstein 級数を導入して、Baisic Identity を述べよう. $g \in G_{1,A}, f \in \mathfrak{S}_l(K_{A,f}^*)$ に対して、

$$E(g,\overline{f};s) \stackrel{\text{def}}{=} \sum_{\gamma \in P_{1,\mathbf{Q}} \setminus G_{1,\mathbf{Q}}} \overline{f(\beta(\gamma g))} \omega_{s+(m+1)/2}(\alpha(\gamma g)) \chi_{K_{1,\infty}}(u(\gamma g))$$

とおく. さらに、f が Hecke eigen form の場合に、normalizing factor を乗じたものを、 $E^*(g,\overline{f};s)$ で表す.

gamma factor を

$$L_{\infty}(f;s) = (2\pi)^{-ms} |\det S|^s |d_k|^{[m/2]s} \prod_{j=1}^{\nu} \Gamma(s-j+(l-n_0+1)/2) \prod_{j=1}^{n_0+\nu} \Gamma(s-j+(l+n_0+1)/2)$$

として、completed L 関数を、 $\xi(f;s) = L_{\infty}(f;s)L(f;s)$ で定める.

Theorem 2 $F \in \mathfrak{S}(\underline{K}_{A,f}^*), f \in \mathfrak{S}(K_{A,f}^*)$ をともに Hecke eigen form とし、l を十分大としておく. このとき、

$$\langle F, \overline{E^*(*, \overline{f}; \omega_{s-1/2})} \rangle_{\underline{G}} = \xi(F \otimes \omega; s) \langle F|_{G_A}, f \rangle_{G_A}$$

Example 2 $S=\begin{bmatrix}0&-1\\1&0\end{bmatrix}$ で、虚二次体 k の類数が 1 だとする、 $f\in\mathfrak{S}(K_{A,f}^*)$ を上半平面 \mathfrak{S} 上の関数とみた $f^{\mathrm{dm}}(z)$ は、通常の一変数保型形式に他ならない。

$$f^{\mathrm{dm}}(z) = \sum_{n=1}^{\infty} a(n)e^{2\pi iz} \quad (z \in \mathfrak{H})$$

と Fourier 展開し、Mellin 変換による Dirichlet 級数

$$\Lambda(f^{\mathrm{dm}};s) = (2\pi)^{-s}\Gamma(s)\sum_{n=1}^{\infty}a(n)n^{-s}$$

$$\Lambda(f^{\mathrm{dm}}\otimes\chi_k;s) = (2\pi)^{-s}|d_k|^s\Gamma(s)\sum_{n=1}^{\infty}a(n)\chi_k(n)n^{-s}$$

を考える(χ_k は k/\mathbf{Q} に対応する Dirichlet 指標). f^{dm} が通常の意味で Hecke 作用素の同時固有関数であるならば、f は G_A 上の Hecke eigen form であり、上で定義した $\xi(f\otimes\omega;s)$ は定数倍を除き、 $\Lambda(f^{\mathrm{dm}};s+(l-1)/2)\Lambda(f^{\mathrm{dm}}\otimes\chi_k;s+(l-1)/2)$ に一致する.

 $\mathfrak{H} \times C \mid \operatorname{Im} z > |w|^2$ の正則尖点形式 F^{dm} と同一視される. [7] において graded ring の構造が決定されており、l=8 の場合、 $F^{\operatorname{dm}}(z,0)=0$ となることが分かる.即ち,Theorem 2 の右辺の内積が消える.従って,L 関数の情報を取り出すには,定値直交群に対して Proposition 2 で行ったように,form S を取り替える必要がある.なお, l=12 の場合には,少なくとも一つの Hecke eigen form に対しては内積が消えないことも [7] から分かる.

References

[1] S. Kato and A. Murase: in preparation.

- [2] S. Kudla: On certain Euler products for SU(2,1), Comp. Math. 42 (1981), 321-344.
- [3] A. Murase and T. Sugano: Shintani function and its application to automorphic L-functions for classical groups: I. The orthogonal groups case, Math. Ann. 299 (1994), 17-56.
- [4] A. Murase and T. Sugano: Shintani functions and automorphic L-functions for GL(m), to appear in Tôhoku Math. J.
- [5] A. Murase and T. Sugano: On standard L-functions attached to automorphic forms on definite orthogonal groups, preprint.
- [6] A. Murase and T. Sugano: L-functions of holomorphic cusp forms on U(2,1), preprint.
- [7] Resnikoff and Tai: On the structure of a graded ring of automorphic forms on 2-dimensional complex ball, Math. Ann. 238 (1978), 97-117.
- [8] I. Satake: Theory of spherical functions on reductive algebraic groups over p-adic fields, I.H.E.S. Publ. Math. 18 (1963), 5-69.
- [9] T. Shintani: On automorphic forms on unitary groups of order 3, preprint.
- [10] 立川秀樹:正定値直交群上の保型形式と L 関数,広島大学修士論文, 1995.